

タイトル	井上真蔵先生を送る
著者	常見，信代； TSUNEMI， Nobuyo
引用	北海学園大学人文論集(58)： 15-16
発行日	2015-03-31

井上真蔵先生を送る

常 見 信 代

井上真蔵先生が3月にご退職されます。先生は、1995年4月に創設3年目を迎える北海学園大学人文学部に英米文化学科教授として赴任されてました。したがって、本学部の在職は実に20年目になり、学部創設期のご苦労を知る数少ない教員のおひとりが去られることになりました。さらに、先生はその前の12年間に北海学園北見大学で勤務されていますので、学校法人北海学園に32年間奉職されたことになります。まさにその半生を学園における教育と研究に捧げたと言っても過言ではないでしょう。

研究室も教授会の席も隣である縁から、僭越ですが、日ごろの感謝をこめてひとこと述べさせていただきます。ただし、以前、先生は「研究室が隣り合わせだと、何となくお互いの雰囲気伝わってくるものである」と書かれていますが（『人文論集』48号、12頁）、「隣組」であっても鈍感人の私は、先生とは違います。お門違いの話になると思いますが、たとえば「困ったもんだね常見さんは」と思っても、「大人」の先生は、淡路島仕込みの関西風イントネーションで「よかったよ」と必ず笑顔で仰るはずです。そして、いつものように数日か一週間後くらいに「あれねー……」とやんわりと厳しくご指摘してくださるはずです。この「柔らかさ」と「怖さ」は、先生のご研究のなかで培われたものなのであります。

井上先生のご専門は国際関係論であり、トロント大学大学院での8年間の研究生活を終えて帰国後は、日本とカナダの姉妹都市交流を異文化接触という視点で事例研究を集積・分析されています。先生によれば、カナダとの姉妹都市の総数は70とのことで、このうち60余りの市町村（うちカナダは15）を先生は実際に訪れ、双方の自治体に残る膨大な記録を渉猟され、また中学生や農家のおじさんなど交流参加者や自治体職員に面会して

調査されています。その調査項目は実に細やかで、それぞれの国では当たり前のことが異文化接触となる瞬間をとらえ、その対応例、解決例を積み上げ、さらに草の根交流の参加者がその体験を通してカナダあるいは日本に対する認識をどのように変化させたかをまとめられています。

井上先生の事例分析や結論から学ぶべきことは多く、たとえば、「大人」の先生は口をはさむことはしませんでした。が、本学の海外交流プログラムにも活用すべきと思ってきました。また、異文化に接触して自分も変わらなければならないという示唆は、昨今のヨーロッパで「国民」統合をめぐる起きている「西欧的普遍主義」を考える際にも参考になるでしょう。「異文化は尊重しましょう」と繰り返していれば事足りた時代は、とうに過ぎたのです。

井上先生、長い間のご指導ありがとうございました。どうか、ご健勝にて、今後も日本カナダ学会理事、また北海道カナダ姉妹都市会議主宰として日本とカナダ両国の実りある交流にご尽力されますように願っています。ところで、先生の隣の研究室からどんな雰囲気が伝わったのでしょうか。いま伺いたくもありますが、怖くもありますので、訳が分からなくなっているはずの10年後にでも、お聞かせください。